

カルチュラル・スタディーズと 「保証なきスポーツ」論

——繋ぎなおすこと＝発話の回路を開く——

山本 敦久

1. 問題の所在

スポーツは世界を映し出す鏡だという考え方がある(マカルーン, 1988)。スポーツのなかで起きる事柄のなかには、社会で生じている出来事が反映されている。スポーツを観戦すること、またスポーツを実践することは、同時に社会や世界を再演する経験である、というように。この考え方にしたがえば、スポーツのなかで生み出される意味やアイデンティティや実践とそれを取り巻く実社会のそれらとの間に、なんらかの照応関係が前提として存在するということになる。

例えば、イギリスのスポーツ歴史家であるマイク・マークシーは、南アにおける政治闘争とボクシングとの深い関係を語ったネルソン・マンデラを想起しながら、近代スポーツは「平等」な社会のあり方を想像する有効なメタファーであると論じている(マークシー, 2001)。スポーツという特別な舞台では、社会階層や年齢、肌の色、貧富の差といった社会的ステータスが失効し、また実社会や選挙、経済活動といった場面においても、スポーツの平等性がしばしば引き合いに出される。マークシーによれば、実社会において平等を担保する想像上の仕組みは、近代スポーツという比較的新しい文化のなかから生み出された考え方である。この仕組みないしはメタファーは、近代社会のあり方を示

すひとつのモデルとして君臨してきた<水平な競技場（レヴェル・プレイング・フィールド）>と呼ばれるものである（マークシー，2001，27）。

「観衆を満足させようとするならば，競技者同士の相対的強弱によってのみ結果が決まることを保証するためにルールや条件が整えられ，ジャッジが下されなくてはならない。客観性という点からみれば，スポーツ競技と科学的実験は似たようなものである。外在的要素が排除されるかぎりにおいてのみ，テストやゲームは妥当だと見做される」（マークシー，2001，27-28）。

この<水平な競技場>というメタファーこそが，近代スポーツを成り立たせ，発展させてきた自律的論理であり，それがひとつの社会通念となって，人々は近代における平等性を想像し，理解する糸口を手に入れてきた。しかし同時にマークシーは，スポーツの自律性を担保するこの平等な領野は，実際のところ，水平でも平等でもない実社会に囲まれていると指摘する。実社会で達成することが困難だとされる理想が実現するからこそ，スポーツの自律的領野は大きな魅力を生み出し，人々を引きつけてきた。また，そのことによってスポーツはその周囲に社会的なステータスや経済的なヒエラルヒーを呼び寄せ，そうした社会関係を反映させてきた。つまり，自律性と平等性なしには成立しえない特別な領域であるがゆえに，そこに人びとは意味を見出し，社会的差異を確認し，また競争原理を学び，市場価値を生み出してきた。このようにスポーツの自律性が，社会の諸力を結集させる磁場を形成する土壌であるとマークシーは論じている。

マークシーの近代スポーツ論は，一見すると「スポーツは社会を映す鏡」という一般的な了解を説明しているように思えるが，じつのところ，彼はスポーツが社会や経済関係を反映する領域だとは想定していないということがわかる。むしろスポーツは，積極的に社会を動かし，変容させる動因であるとする考え方への道筋が提起されている。

ただし，マークシーのこの議論は，「下からの突き上げ」にあったときにそこで諸力がぶつかり合う場となることを示唆している（マークシー，2001，28）。つまり，スポーツはそれを取り巻く社会を疑似的に映し出すのみならず，実社会をその内部に取り込み，そこで社会的な諸力がせめぎ合い，折衝し，別の新しい関係性を生み出す動的な領域なのである。例えば，白人の優位性に対する黒人たちの突き上げ，男性中心に構成されるものに対する女性たちの異議申し立て，資本主義や大企業に集中する富や巨大メディア産業が作り出すスペク

タクルへの抵抗, あらゆる支配的な勢力に抗い, 別の意味や価値や空間を勝ち取ろうとする者たちが深く関与する歴史的契機が, 「下からの突き上げ」となって支配的なスポーツ領域を動的な場へと変えていく。

しかしながら, こうした視座がけっして新しいものではないことも述べておかねばならない。「絶え間ない闘争の場」(Gruneau, 1983; Hargreaves, J. E, 1986; Carrington, 2010), 「スポーツを通じた抵抗」(James, 1968; Edwards, 1969; Donnelly, 1983) といった概念や発想は, 60年代以降の反植民地闘争, 黒人たちの反人種差別運動, 女性たちによる公的な場における身体的な振る舞いをめぐる自由の獲得などを通じて繰り返し検証され, 理論化されてきた。マルクス主義を批判的に乗り越えながら, これまでカルチュラル・スタディーズのスポーツ研究やその影響を受けたスポーツ社会学は, 文脈と歴史的契機に徹底的にこだわり, スポーツを非決定性と偶発性に開かれた「保証なき」ものとして捉える視座を打ち出してきた (Andrews & Loy, 1993; Carrington & McDonald, 2009)。

だからこそ, スポーツは資本主義やナショナリズムの単なる道具であること以上の意味と実践を形作る領域として描くことが可能となる。スポーツは支配の道具ともなるうるし, またそうした支配的な意味や価値や実践を否定し, 批判し, 別の社会のあり方を先行して示すこともある。こうしてカルチュラル・スタディーズのスポーツ論は, 「抵抗」, 「社会批判のプラットフォーム」といった批判的で, 政治的なスポーツの側面を強調してきた (Donnelly, 1983; 1988, Carrington & McDonald, 2009; 山本, 2016)。

しかし, 70年代以降, こうしてカルチュラル・スタディーズが提起してきた問題設定や概念は, 現在の日本のスポーツを取り巻く状況のなかにスペースを与えられてはいないように思われる。とりわけ東日本大震災以降, スポーツには実社会のさまざまな欲望が投影され続けている。「絆」の補強, 「復興」の促進, 癒しや勇気を届けるものとしてスポーツには過剰な期待がかけられている。確かに, マスメディアやスポーツ団体, 行政が喧伝するように, スポーツには絆を与え, 希望を喚起するという重要な役割があるだろう。だが, とりわけ2020年の東京オリンピックの開催決定以降は, 国家とグローバル資本, 巨大メディア産業, そして国際的なスポーツ団体によるスポーツの独占的な支配が決定的なものとなりはじめている (小笠原・山本, 2016)。

グローバル資本と巨大メディアが作り出すスペクタクルのなかに完全に飲み

込まれたスポーツ文化は、ナオミ・クラインが論じた「参事便乗型資本主義（ディザスター・キャピタリズム）」と「祝賀資本主義（セレブレーション・キャピタリズム）」の相互補完性を駆動させる支配的な装置へと馴化されている（Boykoff, 2013）。自然災害や金融危機といった社会的なショックやトラウマを癒し、綻んだ社会的紐帯を、スポーツに投影されたドラマや「感動」によって再生するという仕組みが、現代スポーツの意味や価値や実践を強力に枠づけている。

こうしていま日本におけるスポーツ文化とそれを取り巻く状況は、絆の再生、経済の起爆剤、復興の促進、「レガシー」の継承という名の「先物取引」（阿部, 2016）、そして癒しや希望といった意味、価値、実践としてあらかじめ規定されているとすることができる。言い換えれば、スポーツが生み出す意味や価値、実践は、国家、グローバル資本、巨大メディア、国際的なスポーツ団体によってすでに方向づけられ、決定されているということだ。

本論は、このような潮流に抗い、スポーツをいまだ決定されていないものとして、また、まだ見ぬ社会関係を作り出す契機として捉える視座を探究していく。スポーツは、実社会を反映する予定調和な空間ではなく、非決定的で非必然的な要素を持ちながら、社会変容を導くような批判的な空間を切り開くと考える概念や理論を探查することがここでの目的となる。

2. カルチュラル・スタディーズと「保証なきスポーツ」論

カルチュラル・スタディーズのスポーツ研究にとってきわめて重要な論文として、アンドリュースとロイによる「英国のカルチュラル・スタディーズとスポーツ：過去の出会いと未来の可能性」を挙げることができる（Andrews & Loy, 1993）。このなかで提起されたのが、「保証なきスポーツ」という概念である。アンドリュースとロイは、英国のカルチュラル・スタディーズを牽引したステュアート・ホルの議論を詳細に跡づけていく。とりわけ、批判的読解を通じて、アルチュセールのイデオロギー論とアントニオ・グラムシのヘゲモニー論を精査しながら、さらにレイモンド・ウィリアムズによる意味付与のシステムとしての文化という理解を磨き上げていくホルの作業を丹念に読み込みながら、文化とは「人びとが絶えず、かれらに与えられた要求や欲望を押し曲げようとしたり、かれらのための少しばかりの空間を手に入れようとしたり、

かれらの生活や社会の未来をなんとかするためのわずかばかりの権力を勝ち取ろうとする中間領域」というホールのアプローチを取り入れた (cited in Grossberg, 1986)。

歴史への無関心と主体を捨象する傾向があるアルチュセールとは違い、ホールがアントニオ・グラムシから受け取ったものは、理論化における歴史的な具体性や文脈へのこだわりである。グラムシは、ある特定の歴史的契機に焦点をあて、人間主体 (human subject) の重要性を繰り返し強調した。同様にホールも、主体を(再)発見していく。人間主体は、イデオロギーのなかで構造的に規定されるというよりも、むしろ彼ら／彼女らが生きるその世界を産み出し、再生産し、抗争し、創造していく社会的経験の意味を積極的に生み出すものとなる (Andrews & Loy, 1993)。

そしてホールは、グラムシの「ヘゲモニックな権力関係」という視座を発展させる。ヘゲモニーをめぐる権力関係は、つねに進行中の状況であり、プロセスである。大衆の合意をとりつけることによって権威を主張しようと試みる支配的な社会的同盟による力の行使は、それに抵抗する諸力の要求への応答へと開かれていなければならない。つまり、そこでの統制や支配の位置取りは、つねに脅威にさらされるということだ。したがってヘゲモニーとは、単純に支配ということではなく、むしろ調整や妥協の絶え間ない過程ということになる (Andrews & Loy, 1993)。

また、ここでの議論において重要となるのは、「節合 (アーティキュレーション)」に関する理論である。ホールによれば、「節合とは、特定の条件下で、二つの異なった要素を統合することができる連結の形態である。だが、その繋がりは、つねに非必然的で、非決定的で、非絶対的かつ非本質的なもの」である (Hall, 1986, 53)。特定の言説が編成され、統合され、意味が付与されるということは、ある特定の状況下において、異質の、相違した諸要素が複雑に幾層にも渡って節合した結果として捉えるというのがホールの考え方である。つまり、そこにはあらかじめ必然的な属性はないため、別の方法での再節合の可能性が担保される。

このホールの議論を深めるローレンス・グロスバーグは、「節合のプロセスとは、文脈が形作られ、特定の実践が、それぞれ関係性の異なった構造から外れたり、差し込まれたりする進行中の奮闘」として定義する (Grossberg, 1989, 137)。こうした文化の節合において、ヘゲモニーをめぐる地勢は重要な要因と

なる。支配集団にとってヘゲモニーのモーメントというのは、めったに勝ち取れるものではなく、例えその契機があったとしても、それはある特定の文化実践の節合とその次の再節合の合間に限られる。したがって、文化の意味、文化実践のアイデンティティといったものは、複雑な歴史的、経済的、政治的諸関係の特殊な接続への節合によって重層的に決定されるようなものなのである (Andrews & Loy, 1993)。

アンドリュースとロイは、こうしてホールの次の言葉を引用する。「文化形式における意味と、文化領域におけるその意味の場所、位置取りは、つねにずっと固定されることはない。今年、ラディカルな象徴だったものは、翌年の流行へと中和される。そのまた翌年には、心の底からの文化ノスタルジアの対象となるだろう。文化的象徴の意味は、部分的にはそれが組み込まれている社会的領野によって、つまりそれが節合され、共鳴する実践によって与えられている」(Hall, 1981)。

こうしてホールを継承するカルチュラル・スタディーズは、文化を「絶え間ない折衝領域」として捉える視座を共有してきた。ホールの節合に関する枠組みにおいて、意味やアイデンティティといったものは、絶えず保証なき要素と抗争しつづける。したがって、特定の意味とアイデンティティ、文化実践の間には、必然的な照応関係もなければ、逆に不照応関係も存在しない。そうであるがゆえに「保証なき」という考え方が可能となる。

3. 「保証なきスポーツ」論に「身体」と「情動」を導入する

アンドリュースとロイは、ホールの議論を敷衍しながら、「保証なきスポーツ」という概念を提起する (Andrews & Loy, 1993, 270)。この概念は、スポーツにおける文化がどのようなものなのかを理解するうえで多くのメリットをもたらす他方、ホールやカルチュラル・スタディーズそのものへの批判的応答という側面を持ち合わせている。

「とりわけホールの節合理論は、主体の意識というメタフィジカルな領野がどのように身体的存在の現実と結びついているのかを捉えそこなっている。大部分のカルチュラル・スタディーズの研究は、分析をイデオロギーの次元に焦点化しており、特定の文化実践や文化的アイデンティティに関連して生み出される創造物に結びついた意味、表象、社会的意味作用を明らかにしてきた。し

かし、こうした研究は、文化生産や文化変容の批判的理解に多くの貢献をもたらしてきたものの、身体性という領野におけるイデオロギー分析に基づかないため、弱点も目立つ」(Andrews & Loy, 1993, 270)。

こうしてアンドリュースとロイは「保証なきスポーツ」論のなかに、身体という視座を持ち込む。ジョン・ハーグリーヴズが指摘するように、「スポーツの動きや活動の物質的なコアとなるのは身体である」(Hargreaves, 1987, 141)。身体は、社会闘争の現場であり、階級、ジェンダー、人種といったものは、身体をめぐる、また身体を通じて作用する権力によって構成される。スポーツの実践や観戦の現場において、どのように身体が意味づけられ、表象され、また既存の意味や表象を組み替えていくのかに焦点をあてなければならないというのが、アンドリュースらの議論の骨子となる。

また「保証なきスポーツ」論にとって、「意識と身体性の連関」という考え方も重視されている。アンドリュースとロイは、「情動という概念こそが、意識と身体性との間の連関を橋渡しする有効なものだと」提案し、「ある特定のテキストや実践における主体の節合によって生み出される感情や感動、興奮」を捉えなければならないと主張する(Andrews & Loy, 1993, 270-271)。

この提案をうまく引き継いでいるものとしてアパデュライの研究を挙げることができる(アパデュライ, 2004)。アパデュライの有名なクリケット研究は、「保証なきスポーツ」という考え方を想定しつつ、身体や情動に着眼して展開された優れたものである。アパデュライは、クリケットと脱植民地化の関係について描いている。英国産のクリケットという、ポピュラーな文化であると同時に宗主国の文化的支配を体現するはずのものが、植民地インドの民衆たちの実践のなかで、脱植民地化の動きへと節合され、同時に土着の文化へと奪用＝変容していくような二つの相反するベクトルについて分析している。文化を通じた植民地支配の道具であったはずのクリケットは、インドにおいて、別の意味、別の表象、別のアイデンティティへと節合され、大英帝国の目論見を大きく越えていく。

アパデュライの分析をとりわけ特徴づけるのが、身体や情動への視座である。脱植民地化と土着化という二重の動きは、ジェンダー、身体的快楽、国民形成という回路を通じて複雑に節合される。クリケットを観戦する民衆たちが、選手に同一化し、さらに自分も実際にプレーしていると想像することによって形成される男性アイデンティティと、その男性を近くで眺める女性というジェン

ダー関係を身体的次元でまさに実践していく。

この実践は、クリケット観戦から得られる興奮や快楽を通じて身体ヘクシスへと埋め込まれ、ジェンダーを構成していく。ジェンダー化された実践と身体は、クリケットにおける「インド人」の技巧や技術、「インド人」の勝利や活躍といった物語と繋がりながら、男性中心主義的な観戦スタイルの経験に興奮や快楽をもたらしていく。こうして、植民地からの脱却への欲望が、クリケット観戦の身体的興奮や快楽の回路を通じてジェンダー規範やジェンダー・アイデンティティを育て上げつつも、民族＝国民性へと節合される。

この複雑な節合形態は、イデオロギーに特化した分析からは見えてこない部分を描き出すことに成功している。身体を介した生きられた経験のなかで、夢想と快楽に導かれながら、ジェンダーと国民が構築されていく。このアパデュライの分析は、そうとは言わずに「保証なきスポーツ」論を、意識の次元と身体次元を繋ぐ「情動」という概念において見事に展開している事例である。英国のヘゲモニーは、クリケット文化を編制するうえで、つねに絶えず挑戦に晒されている。クリケットがもたらす意味や実践は、必ずしも支配者の思惑を体现するわけではなく、むしろ偶発的で非必然的な過程のなかで組み替えられていく。こうしてアパデュライは、支配文化であったクリケットが、偶発的な節合によって、徹底的に脱ヴィクトリア朝化され、土着化、インド化されたと論じるのである。

同様の視座は、レス・バックのサッカー研究や上野俊哉のスポーツ論（C. L. R ジェームズ論）のなかにも発見できる（バック，2001；上野，1999）。イギリスの文化研究者であるレス・バックは、サッカーのフランス W 杯について論じるなかで、外部からあてがわれる意味や要求や価値をサッカー文化が取り込みながらも、別のものへと再節合する契機を掴まえている。バックによれば、現代の W 杯はもはや企業利益のための祭典であることを要請され、また国民性を代表する身体運動が特定のステレオタイプに集約されていく場となっている。

それでもバックはプレーの現場とそれを見つめるサポーターたちの間の空間は、アイデンティティやエスニシティ、人種についての様々な考え方が表現され、身体化され、演じられる数少ない舞台になりうると述べている（バック，2001）。グローバルな資本の要請に取り込まれ、国民の物語が付与されてもサッカーは固定化された枠組みを溶解させる。そこには二つの節合の回路がある

という。ひとつは、国民を固定化したステレオタイプやアーキタイプとして見世物化しようとする資本や巨大企業、国家の欲望への節合であり、もうひとつは、既存の身体、つまり国民性や人種化、資本主義による商品化の囲いを破り、あるいは溶解させ、サッカーを見つめるサポーターや観客たちの人生に「新たな別の可能性を与える」という再節合の回路である（バック、2001）。

また上野俊哉も、既存の節合が溶解し、別の節合へと開かれるスポーツの可能性について述べている。スポーツの身体運動や集団の動きや組織的な動きの編制には、それ自体、社会的な意味が付与されているわけではない。そこにあるのは、アスリートの身体の複雑な動きとスポーツ内部の自律的な規範や原理である。意味を付与される前の、つまり秩序化される前の身体や動きこそが、偶発性に開かれたスポーツの自律的な空間である。この「秩序のない不安定な動きのなかでスポーツは、安定と動揺の両方のベクトルをかかえたまま、人々の欲望をすくい上げ、また組織している。この運動＝動きは、たとえ「国民」が形成されたとしても、それ自体終わることのないプロセスである」と上野は論じる（上野、1999、130）。

レス・バックや上野俊哉のスポーツ論は、徹底してスポーツを絶え間ない折衝過程として捉え、保証なき出来事として論じている。スポーツ実践の現場は、実社会のさまざまな意味や価値、規範、欲望をすくい上げ、典型的な国民性、人種のアーキタイプ、ジェンダー規範と階級アイデンティティといったものを再演しもするし、そうした支配的な位置取りを別の回路へと繋ぎなおす可能性を与えもするような偶発的で非決定的な空間なのである。

4. 節合（繋ぎなおし＝発話）の回路を作り出す

これまで論じてきたようにカルチュラル・スタディーズのスポーツ論は、スポーツを受動的な意味生産や実践の現場だとする考え方を退けながら、そこにスポーツの自律的な空間や意味や実践を見出そうとしてきた。スポーツは、安易に実社会の要請を再演し、実世界の欲望を体現することによって「感動」を生む文化装置ではないということだ。スポーツが生み出す意味や実践、アイデンティティは、それほど単純に決定されるものでもないことは、これまで「保証なきスポーツ」論が示す通りである。

ところが、冒頭の問題設定でも指摘したように、いま日本のメディア状況や

スポーツ環境において、スポーツは社会の要請や希望、欲望を体現＝再演してくれる場であるというきわめて受動的な風潮に覆われている。近年流行している「スポーツの力」という言葉も、その言葉が想起するものほど何かを変えていく力をスポーツが有しているということをそもそも想定してはいない。むしろ、「癒し」「絆の修復」「夢の力」「レガシー」へと節合されるスポーツは、無批判にナショナリズムや国民形成、グローバル資本のヘゲモニーへと統合される（有元，2015；山本，2016；阿部，2016）。

本論の冒頭でふれたマイク・マークシーがネルソン・マンデラを想起しながら論じたように、実社会で実現しない課題（平等）を疑似的に実現することがスポーツの自律性を成り立たせてきた歴史的な根拠であるという考え方もあるだろう（マークシー，2001）。しかし、震災からの復興や原発事故の処理といった、先送りされる現実的課題をスポーツがなんとかしてくれるという論理は、ネルソン・マンデラであっても受け入れはしないだろう。このようなスポーツをめぐる言説空間のなかで、ジャーナリズムも、スポーツ社会学者たちも異議を唱えない状況が続いている。スポーツの現場からもいまのところ批判的な声は聞こえてこない。このように2020年のオリンピック開催の言説空間に、スポーツの自律的論理を見つけることは難しい。スポーツの外部からの要求や希望を受動的に受け入れることがスポーツの重要な意味であり、価値となっているようだ。

このような閉塞的な場所に封じ込まれたスポーツ状況を批判的に論じるための方法を編みなおす必要がある。そのために、「スポーツは支配の道具にもなり、また抵抗の場にもなる」という両義性の議論に収斂することのない論理が要求される。「支配の道具になる」というときに、「スポーツは社会を映す鏡」という論理が顔を覗かせるからだ。むしろ本論が探査してきた「保証なきスポーツ」という節合理論にもとづく方法を遂行することこそ、突破口はあるだろう。

これまで見てきたように、「保証なきスポーツ」論は節合の契機を作り出す歴史的な文脈にこだわる。したがって、現在のスポーツをめぐる状況、言説の編制、言論の自主規制、受動的な位置への封じ込めがなぜ可能になっているのかを丹念に掘り起こす同時代史的な作業が要求される。

東日本大震災、原発事故、経済の衰退、格差社会、排他的なナショナリズムや日常に蔓延る人種差別といったものが、どのような契機に、「絆」「癒し」

「希望」「再生」「夢」といった抽象的な言葉と結びつき、人びとの情動を突き動かし、いかなる主体位置を作り出し、それが特定の文脈を築きながらスポーツをめぐる言説や実践へと節合してきたのかをつぶさに確認していく必要がある¹⁾。つまり、外部から声を与えられ、欲望や希望を投影され、身体や振る舞いや発話を規律化されることによるのみ、社会に奉仕でき、価値を付与されるという場所への幽閉、そしてあらかじめ「感動」「国民みんなで」「一体感」といった語彙と快楽と感情のパッケージを喚起することが約束された空間に封じ込められている現在のスポーツ文化の位置取りが、いつしか合意を形成し、「常識」となってきたその複雑な節合形態を解きほぐさなければならないということだ。

ここでもう一度、ステュアート・ホールの節合理論に戻りたい。ホールは、この理論を説明する際に、節合には二重の作用（分節＝節合）があると述べている。ひとつは、本論で追ってきたように、「繋ぐ」、あるいは現在の節合を解いて別の回路へと繋ぎなおすという作用である。もうひとつは、「発話する」（分節化する＝はっきりとさせる）あるいは発話行為そのものを意味するというものだ（Hall, 1986）。

このホールの議論は、「保証なきスポーツ」論を補強してくれるだろう。なぜなら、スポーツの分節化は、「保証なきスポーツ」の節合形態のなかで発話の場所をこじあけること、つまり発話の主体位置に入り込むことによって、節合形態の内部に声を持つということであるからだ。国家や行政の要請、資本や市場の要請が形作るヘゲモニーの優勢的な地勢に対する、スポーツに携わる者たち（スポーツ社会学者も含む）の折衝能力の欠如を自覚したうえで発話行為（分節化の実践）を生み出さなければならないということである²⁾。「言葉をつべこべと並べたてずに体で仕事をせよ」という、あまりにも伝統視されてきた知性と身体の二分法の劣位に置かれる受動的なスポーツ像とその身体を前提とした「常識」のなかでのみ言葉を見出してきたスポーツ文化の発話位置、つまりこのどうしようもなく矛盾が堆積したスポーツの内部から言葉を組み替え、発話の回路を開くことが、「保証なきスポーツ」を駆動させるだろう³⁾。

本論は、カルチュラル・スタディーズのスポーツ研究の理論的な支柱である「保証なき」という考え方をホールの節合理論から整理した。また、この理論を応用し、広く展開してきたいくつかの先行研究をふまえ、「保証なきスポー

ツ」の可能性を探りながら、現在の日本のスポーツ状況を批判的に考察するための理論としての有効性を確認した。

これに続く研究は、徹底した節合理論にもとづきながら、現在のスポーツの位置取りを編制する文脈とヘゲモニーの地勢を丹念に検証していく作業に求められる。その作業は、スポーツ社会学というスポーツ界内部の言葉、あるいはスポーツに携わる者たちの言葉の再編によって発話の場所を切り開くことと不可分でなければならないだろう。

【注】

- 1) こうした研究の初動がいくつか確認できる。有元 (2015) や阿部 (2016) は、すでに2020年東京オリンピックを駆動させる「夢の力」「レガシー」といったものから、ナショナルイズムとスポーツの節合形態を読み解く作業を始めている。
- 2) 鶴飼哲は、オリンピックのスペクタクルを解体するための「情報」戦の重要性を提起する。「民衆のさまざまな層が抱いているオリンピックに対する多様な異議や違和感をく組織化する方途」の欠乏を自覚したうえで、「情報」という集合的な発話の回路を模索していく必要性について述べている (鶴飼, 2016, 20)。
- 3) 様々な矛盾を集積させたスポーツの空間や現場から発話の場所をこじあける介入的な実践と節合理論の実証的研究の先駆的なものとして小笠原博毅の論文が大変参考になる (小笠原, 1998)。

【文献】

- Andrews, D. & Loy, J. (1993) "British Cultural Studies and Sport: Past Encounters and Future Possibilities", *QUEST*, 45: pp 255-276.
- Back, L., Crabbe, T. and Solomos, J. (2001) *The Changing Face of Football: Racism, Identity and Multiculture in the English Game*, Oxford: Berg [最終章が有元健によって訳出されている。「グリーンゴズ, レゲエギャイルズ, そして「黒と白と青?」: ディアスポラ, アイデンティティ, コスモポリタニズム」(2002)『現代思想』第30巻第5号].
- Boykoff, J. (2013) *Celebration Capitalism and the Olympic Games*, Routledge.
- Carrington, B. & McDonald, I. (2009) "Marxism, Cultural studies and sport: Mapping the field", in Carrington, B. & McDonald, I. (eds) *Marxism, Cultural studies and sport*, New York: Routledge.
- Carrington, B. (2010) *Race, Sport and Politics: The Sporting Black Diaspora*, London: Sage.
- Donnelly, P. (1983). Resistance through sport: Sport and cultural hegemony. *Sports et sociétés contemporaines: International committee for the 8th sociology of sport symposium*, pp 397-406.
- Donnelly, P. (1988) "Sports as a Site of 'Popular Resistance'", *Popular Culture and Political Practices*, (ed), Gruneau, R., Toronto: Garamond Press.
- Edwards, H. (1969) *The Revolt of the Black Athlete*, New York: The Free Press.
- Grossberg, L. (1986) History, politics and postmodernism: Stuart Hall and cultural studies, *Journal of Communication Inquiry*, 10(2), pp 61-77.
- Grossberg, L. (1989) The formation of cultural studies: An American in Birmingham, *Strategies*, 2,

pp 114-149.

- Gruneau, R.S. (1983) *Class, sports and social development*. Amherst: University of Massachusetts Press.
- Hall, S. (1981) "Notes on deconstructing "the popular"" in Samuel, R. (ed), *People's history and socialist theory*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Hall, S. (1986) "The problem of ideology: Marxism without guarantees", *Journal of Communication Inquiry*, 10(2). pp 28-44.
- Hargreaves, John. (1986) *Sport, power and culture*. Oxford: Polity Press. [佐伯聡夫・阿部生雄訳『スポーツ・権力・文化：英国民衆スポーツの歴史社会学』, 不味堂出版, 1993]
- Hargreaves, John. (1987) "The body, sport and power relations" in Horne, J & Tomlinson, A (eds.) *Sport, leisure and social relations*, London: Routledge & Kegan Paul.
- James, C. L. R (1963) *Beyond a Boundary*, London: Serpent't Tail. [本橋哲也訳『境界を越えて』月曜社, 2015]
- Marqusee, M. (1999) *Redemption Song: Muhammad Ali and the Spirit of the Sixties*, London: Verso. [藤永康永訳『モハメド・アリとその時代：グローバル・ヒーローの肖像』未来社, 2001]
- 阿部潔 (2016) 「先取りされた未来の憂鬱：東京二〇二〇年オリンピックとレガシープラン」小笠原博毅・山本敦久編『反東京オリンピック宣言』航思社。
- 有元健 (2015) 「「夢の力」に抗する：2020年東京オリンピック・パラリンピックと都市のヘゲモニー」『スポーツ社会学研究』第23巻第2号, スポーツ社会学会。
- 上野俊哉 (1999) 「ディアスポラの思考」筑摩書房。
- 鶴飼哲 (2016) 「イメージとフレーム：五輪ファシズムを迎え撃つために」『反東京オリンピック宣言』『反東京オリンピック宣言』航思社。
- 小笠原博毅, 山本敦久 (2016) 『反東京オリンピック宣言』『反東京オリンピック宣言』航思社。
- 小笠原博毅 (1998) 「文化政治におけるアーティキュレーション：「奪用」し「言葉を発すること」」『現代思想』vol. 26-4, 青土社。
- 山本敦久 (2016) 「スポーツを通じた抵抗：C. L. R. ジェームズとカルチュラル・スタディーズの抵抗理論」『スポーツ社会学研究』第24巻第1号, スポーツ社会学会。